

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	◆水明インターネット句会◆ 令和四年十一月
愚痴ひとつ遺影に一つ庭の柿	初霜や郵便受けに文の無く	石仏のおほどかに座す石露の花	秋祭話し巧みな飴細工	茶の花や慣れ親しみし備前壺	悴け鳥を励ましてゐる悴け人	見あぐれば赤銅の月冬初め	浮寝鳥天守を映す水の碧	芒野のテントホームの暮らしかな	わが裡に空席一つ神の留守	夜鳴蕎麦屋台に見ゆる無言劇	仏前に新酒とくとく供へけり	豆腐屋の女将は外人秋櫻	紅葉散る幼き子らの跳ねるたび	人生の余白に仄か帰り花	秋の滝地震の跡なる岩の位置	朝日差す蒸籠の中の栗おこわ	薪割りの銜が銜山の秋	やはらかひ十一月を好きと言ふ	寄り添ひて傘一本で足る時雨	

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	◆水明インターネット句会◆ 令和四年十一月
		手習ひは般若心経薬喰	蜘蛛の糸に縫るひと葉を小春風	人波にかこち腕組む一の酉	光る空百万石の冬構	毛糸編む夕餉の箸を並べ置き	初霜を踏む音しづか墓参り	冬浅し釣り舟遊ぶ鳴門うず	空澄めり最上階のクレーン車	新米や夜に明るき精米所	隠したるを忘れ探すや暮早し	九十九折の弧線こんもり落ち葉の黄	冬立ちぬ面取り大根昆布の上	秋高く海の青濃し空さらに	両岸の紅葉流るる川下り	引き返すことも大事や椿の実	キャンパスを小判のごとく银杏降る	新そばを丸めて遊ぶ三歳児	晩秋の夕日とどむる由比ガ浜	